

## 「おさしづ」第7巻における個人の身上・事情の伺いと「道」

『おさしづ改修版』第7巻・補遺(明治20～40年)における個人の身上・事情の伺いにあらわれる「道」の用例を整理する。第7巻・補遺は、改修版が公刊される際、新たに収集された「おさしづ」がまとめられている。そのほとんどは個人の身上・事情についての「おさしづ」で、明治35年以後のものは少ないのが特徴である。

このなかに、個人の身上・事情の伺いは1,358件ある。そのうち、「道」が用いられるのは629件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは236件である。

第7巻は、明治20年から40年と時間的な範囲が広く件数も多いので、この巻の「道」に共通する特徴を取り出すのは難しい。ただ、今回の対象は、個人の身上・事情の伺いなので、その「おさしづ」の脈絡はさまざまのはずであるが、この巻を通して読むと、「道」を用いて説かれる内容には、時期によっていくつか特徴があることが分かる。以下では、そのいくつかの特徴についてまとめることにする。

## 独特の用語としての「道」

一つ目の特徴は、時代が経るにつれて、「道」の用例が天理教を表す名詞的な用法になっていくことである。明治20年から25年あたりまでは、「道」の言葉にさまざまな修飾語がつくことが多い。試しに、第7巻に出てくる「道」の用例の最初の10個(明治20年)を列記してみる。

言えばそのまゝ見える道／どういう道／綾や錦仕事に成りてある道／長らえて十分の道／この道／これまで道という／いかなる道／真実道／身の内同じ道／神の道

このように、「おさしづ」で説かれる「道」について、さまざまに説明の言葉が付けられている。個人の人生や、世界にあるさまざまな道とも関連させながら、親神が付けようとしている「神の道」がどのようなものであるか、言葉を尽くして丁寧に説かれている。

しかし、明治20年代の後半になると、そうした「道」の用例は減ってくる。試しに、第7巻に出てくる「道」の用例の最後の10個(明治38～40年)を列記すると次のようになる。

さあ道という／順序の道／道は容易で出けた道やない／道という／道という理／楽しみな道／生まれ更わりという道／道とは／この道

このように、単に「道」と言われることが多くなっている。それまでに説かれてきた「道」の論しを踏まえ、「おさしづ」を聞く者がすでにその論しの内容を知っているものとして、特に説明はなくとも、固有の意味を持つものとして「道」が使われるようになっていく。ここに、教内において、「道」が天理教の信仰を指す独特の用語として定着してきた経緯の一端をうかがうことができる。

## 道の順序

第7巻を通読すると、「道の順序」あるいは「順序の道」が強調される時期が二つある。一つは、明治20～22年頃で、親神が付けようとする「道」のために、各人が心に治めるべき「順

序」が説かれている。

「いかなる道へ、順序々々いかなる道、長らくの処に心を尽し、一つの処順序尽し、どんな順序なら、銘々身の内かりもの八つの道、世界の処へ皆映してある。皆いんねん。いんねんなら世界の鏡に映しある。どんな難儀なへ者も皆映してある。これを見て、めんへも一つあんな身ならと思うて一つのたんのうという処、たんのうが誠。心に誠さい定めば、自由自在と言うて置こう。」(さ21・5・1—中西平八長男平次郎二十六才一年前より心間違いで身上願)

このように、身上の伺いに対して、身の内かりもの、いんねん、たんのうという教理を挙げて心に治める順序が説かれ、「心に誠」を定めることを諭される。同様に、道の順序として、心の治め方、誠の心を定めることが、この時期、繰り返し説かれている。

道の順序が強調される二つ目の時期は、明治32～33年頃である。

「精神という方針一つ順序、道のためならどうでも、人のためならどうでも。身上へ掛かる。……元ぢばという、ぢばから出た。それへこの順序、これ一つ一時に成ったものやない。何処から何処まで、所々に名称と言う、元々の理から先々順序集まる順序世上から一つの理、世上にはほんに成程と言う。」(さ32・6・3 加見兵四郎伴秀二郎身上願)

この時期は、一派独立運動が本格化する頃であるが、そうした関連もあつてか、各教会の元はぢばにあること、また、教祖はじめ古く道に尽くした人々の苦勞があつてこそこの今の教会であるという順序が、繰り返し説かれるようになっていく。

## 道は末代

また、明治30年代になって、「道は末代」ということが、特に何度も繰り返し説かれるようになる。

「一代切りと思えば、何したんと思うは理なれど、この道末代の理。末代所に理のある治まりという。末代理一度も同し事。この理楽しんで運ぶなら、未だへ案じる事要らん。道楽しんで運ぶなら、末代。末代の名が、楽しみやで。」(さ32・10・26 高橋直秀六十才身上願)

これまで尽くしてきた道は消えてしまわないこと、人間は一代で終わりではなく、生まれ更わるるのであり、尽くした道は末代まで続くということが、何度も説かれている。それによって、末代までの先の長い生を思い、今の心を治め、道に尽くして先を長く楽しんで通るようにと励まされている。

以上、第7巻における個人の身上・事情における「道」の用例を、いくつかのまとまりに分けて確認してきた。そこでは、明治20～23年頃という最初期に、親神の望まれる「道」を歩む上で、心に治めるべき順序が教えられ、心に誠を定めることが強調されている。その後続く、教会に関連する順序や「道は末代」ということが強調される際にも、その根本には、「身の内かりもの」の話聞き分け、誠の心を治めるということ、常に諭されている。